岡山大学大学院文化科学研究科紀要第19号（2005．3）

サヴォナローラの『天啓大綱』*Compendio di Rivelazioni* における預言

小　西　礼　子

はじめに

フィレンツェでは、1494年11月から12月に、フランス王シャルル８世が率いるフランス軍の侵攻、それに伴うメディチ家の追放、そして新共和国政府の樹立と、都市国家体制の根本を揺るがす事件が相次いだ。そのような状況下で、以前から神罰の到来とそれに備えた悔い改めの必要を説く預言的説教を繰り返していたドミニコ会修道士ジローラモ・サヴォナローラ Girolamo Savonarola は、フィレンツェだけでなく、イタリア全土で「預言者」としての大きな影響力を持つようになった。

サヴォナローラが『天啓大綱』*Compendio di Rivelazioni*(1)［以下、*Compendio*と略す。］を著したのは、上記の諸事件の翌年、1495年の春から夏にかけてのことであった。この*Compendio*は、サヴォナローラがその冒頭で「これまで説教してきたことを書く」(2)と述べているように、1484年に受けたと彼がいう「神の啓示」に基づき、繰り返し行ってきた預言的説教の重要点を体系化し、自らの「預言」と自らが「預言者であること」の正当性を主張した作品である。

これまで、サヴォナローラと預言者の関係に関する研究は、数多く行われてきた。それらの中でも、G. C. ガルファニーニは、「サヴォナローラには預言者としての自覚があり、そのことを*Compendio*において明晰に述べている。さらに、*Compendio*には、彼の過去の全ての行動の正当化および有効化と、これから行う行動の確固とした根拠について書かれている」とし、使徒たちに与えられたカリスマ性と同じ預言者的カリスマ性を備えたサヴォナローラの確信に満ちた態度が、彼の行動を考察する上で重要なポイントだと論じている(3)。また、L. ペッレグリーニは、サヴォナローラの最も顕著な特異性を「預言者であること」とし、サヴォナローラと国家との関係について「預言はそれを授ける光によって自発的に正当と認められたもの、したがって他の権力の承認からは自立しているものとして理解することと、預言的暗示を政治的権力やその保有者の問題と解釈すること、そしてこれら二つのことを念頭に置きながら、サヴォナローラの影響力の独自性を見分ける」ことの重要性を強調している(4)。一方、C. レオナルディは、「中世の預言者とは、卓越したカリスマ性の持ち主であり、言葉に神の偉大さを付しながら、巧みにその言葉をあやつり、理想と現実、すなわち歴史における全世界のキリスト教化の達成と歴史的状況との挟間で、集中すべき点を明示しようとする、類まれな政治家でもある」と定義した上で、サヴォナローラのフィレンツェ政府への政治的介入について、預言者の神学的定義の観点から論考し、解釈を試みている(5)。

ところで、私見の限りでは、これまでのサヴォナローラと預言者についての研究において、

*Compendio*の内容が具体的に検討されたことはない。本稿では、この*Compendio*を基本的史料とし、まず、*Compendio*における預言的説教内容についての記述を紹介する。そして、サヴォナローラが*Compendio*を著した1495年の時点で、フィレンツェ社会、あるいはイタリア社会における、自らの役割をどのように位置づけていたのかを考察することを目的とする。それは、1484年の「神の啓示」の後に始まったとされる、サヴォナローラの預言的説教の成立と変遷の過程を解明するという筆者のより大きな課題の一部をなす。

1．*Compendio*を執筆するまでのサヴォナローラを巡る史実

*Compendio*は15世紀末のフィレンツェを巡る政治的動向、そして、その中で行われたサヴォナローラの説教と彼の行動を踏まえて記述されている。したがって、その内容を理解するためには、今日確認されている関係諸史実を概観することが必要であると思われる。本章では、サヴォナローラの人物研究として古典的地位を獲得しているR. リドルフィの『ジローラモ・サヴォナローラの生涯』*Vita di Girolamo Savonarola*[(6)]を主要な材料とし、*Compendio*執筆までのサヴォナローラを巡る基本的な史実を確認する。

1452年に北イタリアの都市国家フェッラーラで生まれた[(7)]サヴォナローラは、1475年にボローニャの聖ドメニコ修道院に入り、修道士となった。修行の後、1482年に、読師としてフィレンツェのサン・マルコ修道院に赴任した。1484年には、フィレンツェ近郊のサン・ジョルジョ修道院で「神の啓示」を受け、それに基づいて、翌年の四旬節から「教会は罰せられ、改革される、すぐに」という預言的説教を行い始めた。1487年から1490年までの三年間は巡回説教師として北イタリア諸都市を訪れるが、1490年６月にサン･マルコ修道院に再赴任した。翌年に、修道院院長に就任し、自らの説く初期キリスト教的生活を修道院内で実践するとともに、サン･マルコ修道院をロンバルディア教会組合から独立させて新たにトスカーナ教会組会を設立し、自らその総長の地位に就いた。この間、サヴォナローラは一貫して神罰の到来とそれに備えた悔い改めを説く預言的説教を行っていた。

一方、フィレンツェでは、1492年４月にフィレンツェの実質的支配者であったロレンツォ・デ・メディチが死亡し、彼によって保たれていたミラノ、ナポリ、ヴェネツィアなど諸都市国家間の勢力均衡が崩れ、政治的にも経済的にも不安定な状態が続いていた。そのような状況の中、1494年８月にシャルル８世が率いるフランス軍が、アンジュー家のナポリ王位継承権を主張してイタリアに侵攻、南下し始めた。ジェノバ、ミラノ、教皇領と進軍したフランス軍は、10月末にはフィレンツェ近郊にまで到着した。ロレンツォの息子ピエロ・デ・メディチは政府の承認を得ることなく、単身でフランス軍との交渉に臨んだが、結局失敗に終わり、フランス軍側の要求を全て受諾することになった。この結果に対して、11月５日にフィレンツェ政府はサヴォナローラを含む５人の交渉団を選出し、ピサで新たな交渉を行った。一方、11月８日にフィレンツェに戻ったピエロは、市庁舎への入場を許可されず、翌日の９日には市民によってフィレンツェから追放された。一方、フランス軍は、フィレンツェ使節

団との交渉後、11月17日にフィレンツェに入市した。そして、11月22日の二度目のサヴォナローラとフランス王との会談の後、28日には本来の目的地であるナポリに向けて出発した。

サヴォナローラは、11月1日から待降節（クリスマス前の4週間）の連続説教（『ハガイ書についての説教』）を始めた。フランス軍の侵攻により、彼の預言的説教においては、「神罰の到来＝フランス軍の侵攻」という構図が成立し、サヴォナローラは「預言者」としての名声と影響力を得た。また、預言的説教は、メディチ家の支配的な体制が崩壊した後の新たな政治体制を指示する内容に、次第に変化していった[8]。実際、フィレンツェの新統治体制は、12月22日と23日に成立した法律によって定められた。メディチ政権下で権威を振るったいくつかの委員会は廃止されたが、基本的な官僚機構は温存され、サヴォナローラの主張に従って、ヴェネツィアの共和制を倣ったコンシーリオ・グランデ Consigilo Grande（大会議）が創設された。そして、翌年1月1日に、新体制となったフィレンツェ共和国が正式に発足した。その時の様子をルカ・ランドゥッチは日記に、「新政府が発足した。すべてあの修道士の指図どおりだった」[9]と記している。

2．*Compendio*の構成

1495年の春から夏にかけて執筆された*Compendio*は、同年8月18日に、初版と第2版[10]が当時のイタリア語俗語で出版された。続く9月1日には第3版（俗語）が、9月5日には第4版（俗語）が出版され、10月3日にはラテン語で第5版が出版された。わずか1ヶ月半の間に5回の版を重ねたことになる。また、翌1496年には、パリと神聖ローマ帝国ドイツのウルムでも出版された[11]。これらの事実は、サヴォナローラに対する当時の社会の関心の大きさを窺わせる。

それでは、なぜ、サヴォナローラはこの時期に*Compendio*を書いたのか。その理由は、*Compendio*の冒頭部分に記されている。まず、サヴォナローラは、「神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みにじり、向き直って、あなた方にかみついてくるだろう」というマタイによる福音書の一節（7-6）を引用した[12]。そして、「今まで私は幻想や天啓について多くを語ってはこなかった。なぜなら、聞く人々にそれらを聞く準備ができていなかったからだ」[13]と述べる。すなわち、それまで自分が受けた預言について語らなかったのは、預言を受け取る側（聴衆）の問題であったと彼はいう。しかし、それにもかかわらず、彼は、「人々は私の言うことを正しく書きとめてない上に、悪意によって言っていないことや誤ったことを言いふらしている」[14]という理由から、この時期（1495年）に執筆の決心をした。また、*Compendio*の最後部においても、「私は、選ばれた者の慰めのために、また、敵対者の中傷を払拭するために、解釈と共にこの幻想[15]を広めたかった。たとえ私の意思が、むしろそれを隠すことであったとしても」[16]と述べている。これらの、執筆の理由についての記述は、この時期すでにフィレンツェにおいて、反対勢力によるサヴォナローラへの誹謗中傷が多かったことを示しているといえよう。すなわち、人々が彼の説教を彼の意図通りに解釈せず、また、悪意によって曲解して伝えていることを、サヴォナローラ自身がもはや無視できない状況になっ

ていたということになる。

また、同時に、堕落した聖職者と教会の改革を唱えていた[17]サヴォナローラとローマ教皇庁との関係は、フランス軍のフィレンツェ通過による「預言者」としてのサヴォナローラの名声の高揚とともに一層悪化していた。というのも、教皇庁には、サヴォナローラの反対勢力によって、中傷目的で歪められた情報が多く届けられていたからである。その結果、フィレンツェにおけるサヴォナローラの影響力の大きさに対して、教皇は1495年7月21日に、「仲介者をおかず、直接、彼(サヴォナローラ)から、彼の預言について知りたい」という意向を示した小勅書を発した[18]。したがって、*Compendio*は教皇からの要請に応えた著作ともいえよう。

では、なぜ*Compendio*はイタリア語俗語 volgare で書かれたのであろうか。当時、書くことも、そして、おそらく考えることもラテン語で行うのが日常であったサヴォナローラにとって、「俗語で書く」ことは異例である[19]。俗語とラテン語の両方で出版した理由について、彼は*Compendio*に、「神によって示されたことが、〔・・・〕、決して歪められないために、俗語だけでなくラテン語でも出版した。なぜなら、そうすれば誰にとっても共通したことになるだろうから」[20]と明記している。すなわち、俗語を用いる一般人と、ラテン語を用いる聖職者や知識人の双方が、サヴォナローラの受けた「神の啓示」と「預言」と幻想を、彼の意図通り理解することを望んでいたことになる。この点において、後に同じく預言について、ラテン語だけで著した『預言の真実についての対話』*Dialogus de veritate prophetica*[21] (1497年)とは目的が全く異なっている。後者は専ら神学者に対して、「預言者」としての自らの正当性を主張した著述である。したがって、*Compendio*は、サヴォナローラの、社会全体に対する一種のプロパガンダということができよう。

本稿では、テキストとしてサヴォナローラ国民版全集(Edizione Nazionale delle opere di Girolamo Savonarola)に収められた*Compendio*[22]を用いる。本版では、1ページ30行で全125ページの分量なので、サヴォナローラの著作の中では、比較的短くまとめられた作品といえる。全体は、内容上3部に区分することができる。最初の部分(p.3～p.23)には、*Compendio*執筆時にはすでに実現(実証)されていた預言的説教内容について、二番目の部分(p.24～p.118)には、1495年3月31日の説教で語った後、「多くの者に不完全に書きとめられて、異なる場所に送られてしまった」[23]神のお告げの祝日から8日目に見た幻想の詳しい描写[24]、最後の部分(p.118～p.125)には、フィレンツェの未来に関する「預言」について、がそれぞれ叙述されている。次章以下、預言的説教内容についての記述に注目し、サヴォナローラが見た幻想とそれについての預言的説教、そしてそれらと現実との照合という*Compendio*の構成に沿って、サヴォナローラと預言者の関係について論考する。

3．預言者についての定義と幻想

サヴォナローラは、まず最初に、「預言者が人々に説教することを神からどのようにして知るのかを各人が理解することを目的として、我々が言うべきことの理解のために、預言的天啓の形式を短く

まとめることが必要だと思われる」[25]といい、聖書に記された預言者と預言的天啓の形式について以下のようにまとめている。

これから起こる未来の事柄を知ることは神の英知の特質である、その存在において、全てのものは過去であり、現在であり、未来でもある。すなわち、「すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです」と聖書に書かれているように[26]、神だけが永遠の光の下、未来のことを知る者なのだ。そして、神によってのみ、彼が明らかにして下さる事柄のみを知ることができるのだ。その天啓において二つのことがなされる。[1] 一つは、預言者に超自然的な光を呼び覚ますことである。この光は神の永遠性の確固たる一部分であり、この光によって、預言者は自分に二つのことが明らかにされたことを確信する。すなわち、[1-a] 一つは示された未来のことが真実であるということであり、[1-b] もう一つはそれらが神による事柄であるということである。天啓において神がなされる二つ目のことは、[2] 神が知らせたい事柄や予告したい事柄をはっきりと預言者に提示することである。[2-a] ある時は、ソロモンや預言者ダヴィデに行ったように、預言者の知性に直接予告すべき事柄を吹き込む。[2-b] ある時は、預言者ダニエルの場合のように、創造的幻想において示されるが、その時預言者は先に述べたような超自然的な光により、幻想の意味を全て理解する。[2-c] またある時には、神は外の感覚、特に視覚に示すべきことを写し出す。このような外的で図像的な光を神は天使の仲介を通して行う。〔・・・〕したがって、預言的天啓は精神的天使を通して神によってなされるのである。〔・・・〕私がこれらのいかなる形で未来のことを知った場合でも、常に先に述べた光でそれらが真実であると確信した。[27]（［ ］内は筆者の補足。下線は筆者。以下同様。）

すなわち、天啓を受け、その意味を理解するものが預言者であるという預言者の資質の確認であり、また、サヴォナローラ自身がその資質を満たした「預言者」であるという主張である。ここで最も重要なのは、彼が「幻想を見て、その意味を理解すること＝預言者」という幻想と預言者の関係を明らかにしていることである。なぜなら、この記述の後、サヴォナローラは「預言者」であることの傍証として、具体的に、自分に与えられた「預言」や自分が見た幻想を描写し、そしてそれらについて自らが行ってきた説教と現実に起こった出来事を照らし合わせて確認していくからである。*Compendio*で挙げられている、「預言」をもたらす幻想は、(1)空に浮かぶ剣を持った手の幻想、(2)二つの十字架の幻想、の二つである。以下に、それぞれの内容とその意味をまとめる。

(1)空に浮かぶ剣を持った手の幻想

これは、サヴォナローラが、1492年の待降節説教の最終日の前夜に見た幻想である[28]。回想による

と、フィレンツェの街の上空に、剣を握り締めた腕から先だけの大きな手が浮かんでいた。そして、その剣には、「早くそして速やかに、地上に神の剣が」と、それを持つ手には「その裁きは真実であるから正しい」と書かれていた。地上に下りてきた天使が、この世に生ぬるい人(信仰にも改革にも積極的でない人)や知識人がいることを確認すると、「手は剣を地上に向けた。すると、すぐに曇り、大きな雷と稲妻と火と共に剣やあられが降ってきたようだった。その時地上では、戦争、ペスト、飢饉、そして大きな災難が起きていた。」サヴォナローラの解釈によれば、これらの「酷いペストや鋭い剣は、悪い高位聖職者や哲学の説教師の統治を象徴している。彼らは天上の王国に入らないが、他の者を解き放つこともない。すなわち、教会は非常に悪い状態であり、彼らの引き起こした争いは、どんな身体的災難よりも悪い状態であったことを示そうとしていた。」

また、腕の上方には、光の柱が天上に向かって伸びている。この光から出た一つの大きな声が、サヴォナローラに向かって、「地上に神の怒りを伝えること、人々の心の中に、愛と神の子の受難の恩寵の記憶を甦らせること、そして自らではなく信者たちを育てる善き羊飼いと説教師を遣わされるよう、人々が神に祈ることを説くこと」と語った。

この幻想では、腐敗した教会組織と堕落した聖職者の告発と、それらに対してサヴォナローラが行うべきこと、すなわち「預言者」の使命が示されている。サヴォナローラの場合、その使命とは、地上における「預言者」として、神罰の到来とそれに備えた悔い改めを説く預言的説教を行うことである。

(2)二つの十字架の幻想

サヴォナローラが1492年の四旬節の聖金曜日の夜、フィレンツェのサン・ロレンツォ教会で説教を行っている時に、この幻想を見た[29]。まず、「神の怒りの十字架」と書かれた黒い十字架がローマの中心部に突き刺さり、その後ローマには嵐が起こり、火や剣が降り、多くの人が死んだ。しかし、この惨事の後、空は明るく澄み渡り、「神の慈悲の十字架」と書かれた金色の十字架がエルサレムの上に現れ、そしてこの十字架の下には、世界中から全ての世代の男女がそれを賞賛し、抱擁するために集まって来た。

この幻想では、「神の怒りの十字架」によって、堕落したローマ教会と聖職者に襲いかかる災難や試練が、また、「神の慈悲の十字架」によって、試練の後の改革された教会が新エルサレムとなり、さらに繁栄し、全世界においてキリスト教への改宗が行われることが示されている、とサヴォナローラは解釈している。

次に、以上の二つの幻想と、神罰の到来についての預言的説教内容の関係について見てみよう。

4．神罰の到来についての預言

サヴォナローラは、1484年にフィレンツェ近郊のサン・ジョルジョ修道院で受けた「教会は罰せられ、改革される、それもすぐに」という「神の啓示」の体験以来、一貫して神罰の到来とそれに備えた悔い

改めを説く預言的説教を続けた。*Compendio*では、預言と預言者の観点から、それまで行った預言的説教の内容と自らの行動が説明されている。

まず、サヴォナローラは、1490年のフィレンツェ再赴任を以下のように解釈している。

> 全能の神はイタリアに、とりわけ世俗人同様に聖職者の間に、罪が満ちるのを見て、大きな鞭によって彼の教会を贖うことを決心された。〔・・・〕神は、この鞭に対して心の準備ができるように、この鞭の到来がイタリア内に予告されることを望まれた。また、身体の中心が心臓であるように、フィレンツェはイタリアの中心であるから、予告されたこれらの事柄を実行するためにこの都市を選ばれた。〔・・・〕そして、この務めのために、他の多くの下僕の中から、力不足で役にはたたないにもかかわらず私が選ばれ、1489年に[30]私の上役たちの依頼によりフィレンツェに赴任してきた。〔・・・〕この年は人々に対してずっと三つのことを繰り返し説教し続けた。一つめは、教会は今の時代に革新されるだろうということ、二つめは、この革新に際して、神はイタリア全土に大きな鞭を与えられるだろうということ、そして三つめは、これらはすぐに実行されるであろうということである。[31]

*Compendio*には、この啓示がサヴォナローラに示された、日時、場所、形式などの具体的な説明は記述されていないが、1484年に受けた「神の啓示」とするのが自然であろう。それによると、イタリアには人々の罪の故に上述の神の鞭＝神罰が下されること、その到来が予告されること、神罰が下される場所としてフィレンツェが、神罰の到来を予告する者としてサヴォナローラが選ばれたこと、そしてこれら全てが神の意思によって行われた、もしくは行われる、という内容であったことが明らかにされている。そして、サヴォナローラのフィレンツェ再赴任も、この啓示の一部として認識されている。

また、前章(1)の空に浮かぶ剣を持った手の幻想と(2)の二つの十字架の幻想の前半部分は、この啓示の内容と一致する。年代的に、二つの幻想の方が後に起こったことなので、それらは、サヴォナローラが先に受けた、上記の啓示の実現の可能性、すなわち真実性を高める意味をもっていたといえよう。

さらに、サヴォナローラが「預言者」として神に選ばれたことと、神罰の到来の予告として預言的説教をすることに関しては、以下のようなフィレンツェでのエピソードが記されている。

> 1490年の四旬節の第二日曜にフィレンツェのサンタ・レパラータ教会で行う説教の準備をすでに進めていたが、それを止め、もはやそのようなこと[神罰の到来とそれに備えた悔い改め]を説教しないことを決心した。このことの証人は神である、しかし、土曜日の朝からと日曜日の明け方まで、私は何を考えようとしても、それ[神罰の到来とそれに備えた悔い改めの説教]以外のことに集中できず、行き詰まってしまった。そしてその[日曜日の]朝、

長く疲れた夜の果てに、私は言葉を聞いた、「愚か者よ、おまえがそのように[神罰の到来とそれに備えた悔い改めを]説教することが、神の意思だということがわかってないのか？」と。そして、あの朝、私は恐るべき説教をした。(32)

このエピソードもまた、サヴォナローラが神に選ばれた「預言者」であり、彼の預言的説教も神の意思であると彼が確信していたことの証左の一つである。実際、サヴォナローラは神罰の到来とそれに備えた悔い改めを説く預言的説教を始めてから、それ以外の題材で説教を行った事例は知られていない。

続けて、サヴォナローラは、自らの預言的説教が神の意思によることを示す「より驚くべき事柄」を挙げている。1491年から始めた創世記についての説教と、フランス王が率いる軍隊の侵攻との内容的かつ時期的な符合性(あるいは同時性)についての例である。

1491年に創世記について説教を始め、1494年まで(ボローニャで行った一度を除いて)全ての待降節と四旬節のためにこの[テーマの]説教を続けた。そしてその都度、前回の待降節や四旬節で私がやめたところから再開し、創世記の解釈についての説明を続けていたが、この試練が始まった時にちょうど洪水の章に達した。したがって、[1493年の]全ての待降節[説教]と1494年の全ての四旬節[説教]はノアの箱舟の建設の奥義に費やした。そして、ちょうど「二階と三階を造りなさい」と聖書に書いてあるところで私は説教をやめていた。そして、9月の使徒聖マタイの日に、説教を再開し、[前回]私がやめたところから創世記を取り上げた。すなわち、「見よ、わたしは地上に洪水をもたらし」云々の箇所である。すでに、フランス王が軍隊と共にイタリアに侵入したことは広く伝えられていて、すぐにこれらの創世記の言葉[が、当時フィレンツェやイタリアが置かれている状況に合致していること]に、多く者が驚愕した。そして、彼らは、この創世記の教えは神の秘められた資質によって、このように[1491年から始められ、ちょうどフランス軍のイタリア侵攻の時にノアの箱舟建設の章に行き着くように]次から次へと導かれたということを公言した。〔・・・〕このような未来の事柄を、私は聖書の論拠と共に、道理や様々な比喩と共に、早い時期に予告していた、ということを私は記しておく。(33)

ここで述べられているのは、フランス王と軍隊のイタリア侵攻が、創世記における洪水、すなわち、それまでの預言的説教で繰り返された「神罰」であるという認識である。そして、このことは、サヴォナローラのそれまで説教において、抽象的かつ時期的期限を欠く未来の事柄としてしか捉えられていなかった神罰の到来が、フランス王と軍隊のイタリア侵攻によって、現実のものとなったという認識をも示している。それは、とりもなおさず、サヴォナローラの預言的説教が「預言」であること、そし

てまた彼が「預言者」であることが実証されたという主張である。

*Compendio*には、フランス軍のフィレンツェ入市以前にピサで行われ、サヴォナローラが市政府代表の一人として参加した、フランス王シャルル８世との交渉の場面でのサヴォナローラの言葉が６ページに亘り詳しく回想され、描写されている。実際に、この交渉の後、フランス軍はフィレンツェに入市したが、「奇跡的」に平和的に通過していった(34)。このことについて、「神の慈悲が、フィレンツェの人々を巨大な危機から解放したことは、全ての人々が証人である」(35)と記し、「預言者」としてのサヴォナローラの説得が成功したことを強調している。

そして、次に注目すべきは、この交渉の場面で、イタリアに対する「神罰」の役割を担ったシャルル８世に対して、サヴォナローラが「とうとうあなたは来られた、王よ、あなたは来られた、神の遣いよ、あなたは来られた、正義の遣いよ」(36)と喜びを表していることである。なぜか。次章では、預言的説教の内容とシャルル８世の役割について検証する。

５．「新キュロス」とシャルル８世の役割

上記のシャルル８世との交渉場面を描写する前に、サヴォナローラは「それから後、再び神の啓示を受けて、イザヤ書に書かれているキュロスに似たものが、山を越えるだろうと私は語った」(37)と書いている。この一文は、それまで*Compendio*においては一度も言及されなかった「キュロス」という表現が突然に表れる点で、またこの預言をいつ、どこで語ったかも明記されていない点で、いささか唐突かつ不明瞭な印象を与える。しかし、サヴォナローラの言わんとすることは明確であろう。すなわち、この「山を越えてくるキュロスに似た者」とは、続く叙述から、「アルプスを超えて到来するフランス王シャルル８世」を意味していることは容易に推定される。

周知のように、キュロスは、バビロニアに捕囚されていたユダヤ民族を解放し、彼らの神殿をエルサレムに再建することを許したペルシア王であり、旧約聖書においては「解放者」として描かれている。したがって、今回のフランス軍のイタリア侵攻の場合も、フランス王は「解放者」でなければならない。だが、筆者の知る限りでは、フランス軍のフィレンツェ通過以前に、サヴォナローラが預言的説教において「解放者」の到来を語ったことはない。しかし、*Compendio*の以下の記述によると、サヴォナローラにとって、フランス王に対するこのイメージの追加は、フランス軍のフィレンツェ通過後の産物ではない。「特別な事柄はそのままにしておいた。混乱を引き起こさないために、私は語らなかったのだ。〔・・・〕なぜ私は公に語らなかったのか。恐らく私がそれらを語っていたとしても、誰も信じられなかっただろう、もっとも現在はそれらを書いてはいるが」(38)とサヴォナローラは弁明している。すなわち、神に遣わされた「神罰」である者は同時に「解放者」でもあるということは、当初から彼の「預言」の一部であったと主張していることになる。

ところで、フランス王が「キュロス＝解放者」であるとするなら、誰を何から解放する者なのだろうか。サヴォナローラによると、彼は、フィレンツェ政府をメディチ家による支配的な体制から解放し、

新たな共和制を樹立する「解放者」であった。そして、この「あえて語らなかった預言」が、前章の最後で引用した、シャルル８世との交渉の場面での歓迎の言葉をサヴォナローラに導き出させたと共に、シャルル８世の「解放者」としての行動とその結果について、次のように記させたことになる。「神の啓示を受けた僕の言葉をよく聴くように。神に遣わされたあなたはあらゆる所で慈悲を行わなければならない、とりわけフィレンツェで。なぜなら、[神罰による]正義と[解放者による]慈悲は常に同時に行われるものだからである。〔・・・〕もし、あなたがそのようにすれば、神はあなたの世俗的王国を広げ、あらゆる場所での勝利を与えるだろう、そしてついには永遠の王国をもたらすだろう。」(39)

さて、以上のような、サヴォナローラが「あえて語らなかった預言」によって、フランス王に新たな役割が追加されると、1484年の「神の啓示」の解釈にも変化が生じてくる。

> フランス王[の到来]とフィレンツェ政府の革新が近づくにつれて、私がどんなにフィレンツェの市街の上に剣や多くの流血[の幻想]を見ようとも、神はこれら全てのことの予告を実現する場所としてフィレンツェを選ばれたと感じながらも、この預言は条件付になったのではないか、すなわち、もしフィレンツェの人々が悔い改めるならば、少なくとも一部分を神は許すのではないかという大いなる期待が[私の心に]湧き上がってきた。(40)

すなわち、「罪が満ちたので神罰を下すという神の絶対的な決定」に、「もし悔い改めるのであれば」という「条件」が付けられ、それによって神罰の軽減の可能性が生じるのではないか、と解釈し始めたことになる。サヴォナローラは、この「絶対的 assoluto」と「条件付 condizionato」という用語に関して説明している(41)。すなわち、「絶対的」とは「いかなる方法においても預言された事柄が行われること」であり、「条件付」とは「もしある事柄が行われたなら、そのことに適応するような[変更された]形で預言された事柄が行われること」である、と。さらに、*Compendio*の最後部では、以下のように、これらの用語の神学的意味を説明している。

> 預言は絶対的、あるいは条件付である、ということを全ての人々が理解するために、ここでは神は二つの方法で未来の事柄を知っているということを記しておくべきであろう。一つめは、神の永遠性においては、常に[時は]現在であるということによって、神は未来の事柄を知っているということであり、二つめは、原因の法則に導かれることによって、神は未来の事柄を知っているということである。神がこの二つの方法によって、常にいかなる未来の事柄を知っていようとも、とりわけ原因が神のように特別な場合は、結果は原因の全ての効力を受けるとはかぎらない。したがって、預言者は、常に、神からこの二つの方法によって、未来の事柄についての知識を得るわけではない。しかし、ある時は一つめの方法によって、予知や運命の預言を、またある時は二つめの方法によって、刑罰による警告、もしくは約束

の条件つき預言を得る。なぜなら、そのように予言されたことは、整然と導かれるべき事柄によって、原因の法則が変化を被らない場合にのみ実現されるということを理解する必要があるからだ。[42]

すなわち、神の永遠性と原因の法則によって、未来の事柄についての預言には「絶対的」に実行される預言と、「条件付」で実行される預言がある。この二種類の預言は、サヴォナローラの未来に関する「預言」にも適応される。すなわち、教会改革やフィレンツェ市民に対する神の約束された恩寵は「絶対的預言」であり、フランス王に関する部分は「条件付預言」である。フィレンツェをメディチ家の支配体制から「解放」したフランス王は、サヴォナローラの説得に従う形で、教会を堕落した聖職者から「解放」し、改革するためにローマへ行った。しかし、サヴォナローラが*Compendio*を執筆している時点では、何の成果も得られてはいなかった。このようなフランス王に関わる状況に対し、「預言者」としてサヴォナローラは以下のように記している。

フランス王は神に選ばれた正義の使者であり、たとえ全世界が反対したとしても彼は勝利し、栄光に満ちるであろう。しかし、もし、彼が間違えば、とりわけフィレンツェに対して悪業を行えば、多くの神罰が下るであろう。〔・・・〕なぜなら、神はフランス王に、イタリアと教会の改革の始まりのために選ばれたフィレンツェの友であり、支持者であることを欲しているからだ。もし、フランス王が拒否したとしても、神は無理矢理にでも[教会改革を]行わせるであろう。神が彼に言わせたことを彼が守ったなら、大王国を築くであろう。一方、彼が神の意思にそまぬことをしたならば、イスラエルの初代の王サウルのように、神に叱責され、神はダヴィデをサウルの代わりに選んだように、他の者をこの正義の使者に選ぶだろう。なぜなら、これらのフランス王と交わされた約束や恩寵は、条件付であり、絶対的ではないからだ。〔・・・〕神からインスピレーションを受けた私は、記しておく。もし、フランス王が上述したことを守ったなら、間違いなく勝利し、巨大な王国を得るであろう。しかし、守らなければ、彼の行うことは困難にぶつかる。正義の祈りが彼を助けなかったとしても、神によって叱責されるだろう。[43]

ここで、サヴォナローラは、フランス王に対し、最後まで神に選ばれた「解放者」としての役割を果たし、常にフィレンツェの味方でいるように繰り返し述べている。また、当時のイタリアの状況を考えると、引用中の「フィレンツェの友」という表現には、政治的な意味が含まれていることは明らかである。これらの、フランス王への脅しとも思える記述からは、二つの絶対的な未来に関する「預言」、すなわち教会改革とフィレンツェに約束された恩寵を実現させようとする、「預言者」としてのサヴォナローラの強固な姿勢が窺えよう。

ところで、「絶対的な預言」を実現させるために、フランス王だけでなく、またフィレンツェの人々にも役割が与えられている。続いて、フィレンツェ市民に関する記述について見てみよう。

6．フィレンツェの未来についての「預言」

サヴォナローラは、フィレンツェ市民に対して、「解放者」によってもたらされた新たな共和制を維持することが最も重要なことだと勧告している。なぜなら、新たな政治体制もまた、神の意思だからである。

> フィレンツェの国家体制は変化したが、いまだにある市民に対しては正義が行われていない。フィレンツェ市民を苦しめる者は、彼らを不当に傷つける者であり、神の正義によって罰せられることは確実だ。
>
> 私は、何度も、広く聴衆に対して説教してきた。そして、神のインスピレーションによって以下のように確信する。だれもフィレンツェを支配する者になろうとしてはいけない。また、現在の政府を打倒してはいけない。[もし、そうしたら、]神は、その人、その家、そして[その人に]従う者全てを罰し、終には災いをもたらすだろう。
>
> さらに、全世界がフィレンツェに敵対したとしても、神が約束されたことは絶対に実行されるということを、神の光によって何度も確信しながら、聴衆に対して繰り返し語ってきた。もし、フィレンツェ市民が、もうすでに始めたように善き人生を歩むなら、まず第一に神罰の大部分は減少し、慰めにかわるだろう、そして第二に[神の]恩寵と約束が実現されるだろう、さらに第三には息子たちにも[その恩寵や約束が]与えられるだろう。したがって、上記の恩寵はフィレンツェという都市に絶対的に約束されたことであり、決して特定の人々だけに約束されたことではない。しかし、行いの悪い市民は、その行いを改めない限り、恩寵が与えられることはないだろう。(44)

サヴォナローラは、フィレンツェ市民には、まず政治的に新たな共和制を維持すること、そして善き人生を送ることが重要だと説いている。「善き人生」という表現は、一般には宗教的道徳的文脈で用いられるが、上記引用中のフィレンツェ市民の「善き人生」については、「もうすでに始めたように」と記されていることから、その中に新政府樹立も含まれていることが窺える。したがって、サヴォナローラのフィレンツェに対する言説においては、政治的事項と宗教的道徳的事項が、分かち難く密接に結びついている。

また、「神が約束されたこと」とは、「フィレンツェは今までにないくらいさらに栄光に満ち、権力をもち、富むだろう」(45)という未来への「預言」である。しかし、サヴォナローラによると、試練は終わったのではない。「フィレンツェには次の試練がやってくるであろう。イタリア、特にローマは大混乱

になる。そして、教会の高位聖職者やイタリアの君主たちには悔い改め以外に治療[神罰を回避する方法]はない」[46]、それ故に悔い改めを続けなければならないのである。

*Compendio*の最終部分では、この著書の内容が「真実」であることについて語っている。そこでは、エゼキエル書、ダニエル書、ゼカリア書など旧約聖書の預言書を挙げながら、それらの中に「聖霊によって行われた同じような出来事が見つかるだろう」[47]と述べている。また、自分のおかれた状況とキリストの受難をも重ね合わせている。そして、次のように語っている。

> 神に選ばれた者たちよ、多くの矛盾について、どうか混乱しないで欲しい。我々についての事柄が、キリスト、預言者、使徒、他の全ての聖人たちの教義に似れば似るほど、この信仰に留まらなければならない。〔・・・〕そして、たとえ多くの者が信じず、他の者が我々を追い払ったとしても、驚いてはいけない。なぜなら、キリストは、我々が行い得ない、卓越した説得力でユダヤ人を説教し、偉大で、すばらしい奇跡で彼の教義を確実にしたが、それにもかかわらず、少数の者しか彼に従わず、多くの者は彼を追い払い、受難の日には、全ての人が彼を追い出し、聖母にしか完璧な信仰は残らなかったからだ。神に選ばれし者は迷う、ということをいかなる者も疑ってはならない。[48]

聖書において、預言者は常に迫害され、追放される。したがって、サヴォナローラによれば、敵対者に誹謗中傷されている、フィレンツェでの状況自体が、自らの「真の預言者」の真実さを証明していることに他ならない。

おわりに

サヴォナローラは、1495年に、確固たる理由と目的の下に、それまでの「神の啓示」に基づく預言的説教の内容を要約した*Compendio*を執筆した。*Compendio*の最初の部分では、本著作が執筆された時点で、すでに実現され、「預言」として実証された説教内容を現実の出来事と照らし合わせることによって、自らの「真の預言者」としての正当性を主張している。すなわち、「神の啓示」や幻想で示された「神罰の到来」が、フランス軍のイタリア侵攻によって実現されたことを根拠として、「預言者であること」の真実性を論じている。次に、フランス王シャルル８世については、イタリアに対する「神罰」であると同時に、フィレンツェの新政府体制樹立において担った、「キュロス＝解放者」としての新たな役割を強調している。それは、サヴォナローラの主張に一貫性が欠けていることに対する弁明にもとれるが、「絶対的預言」と「条件付預言」の論理を用いて、自らを正当化している。そして、最後の部分では、そのシャルル８世のローマに対する行動の重要性と共に、フィレンツェやイタリアの今後実現されるはずの「預言」を述べている。このような構成から、最初に記された、実証された「預言」と「真の預言者」の正当性は、最後部のフィレンツェの未来に関する「預言」の実現の確実性を裏付けている。すなわち、

サヴォナローラの「預言」は、「これまでも実現したのだから、これからも実現するはずだ」と。

サヴォナローラにとって、*Compendio*は、初めて読者を想定して執筆された、すなわち出版することを目的とした著作である。その構成は巧みに計算され、読者に記述内容の信憑性を強くアピールする役割を果たしている。また、イタリア語俗語で出版することによって、知識人だけでなく民衆にも、彼が「真の預言者」であることを広く知らしめ、フィレンツェ内外での「預言者」としての立場を確立させようとした。

註

(1) Savonarola, Girolamo, *Compendio di Rivelazioni*, (Edizione nazionale delle opere di Girolamo Savonarola), a cura di A. Crucitti, Roma, 1974 (以下*Compendio*と記す).

(2) *Compendio*, p. 4.

(3) Garfagnini, Gian Carlo, 'Savonarola e profezia: tra mito e storia', *Studi medievali*, ser. 3, 29, 1988, pp.173-201.

(4) Pellegrini, Letizia, 'La profezia tra il pulpito e lo stato: il caso di Girolamo Savonarola', *Annali dell'Istituto storico italo-germanico*, XXV, 1999, pp.433-456.

(5) Leonardi, Claudio, 'Girolamo Savonarola: santità e profezia', in *Convegno Internazionale Agiografia nell'Occidente cristiano: secoli* XIII-XV, Roma, 1980, pp. 57-77.

(6) Ridolfi, Roberto, *Vita di Girolamo Savonarola*, Firenze, 1997.

(7) サヴォナローラの祖父ジョバンニ・ミケーレ・サヴォナローラはフェッラーラのエステ家の宮廷医師であり、医学だけでなく、政治や道徳についての著作も残したルネサンス期の「万能人」だった。　高橋友子、「15世紀イタリアの医師のまなざしと生殖・妊産婦の養生－ジョバンニ・ミケーレ・サヴォナローラの論考から－」『イタリア学会誌』、51、2002、pp. 124-149。また、*Compendio*執筆時のフェッラーラ公エルコレ・デステはサヴォナローラの信奉者の一人であり、*Compendio*出版に際してサヴォナローラに金銭的援助を申し出ている。Ridolfi, *op. cit.*, p.111.

(8) 高津美和、「フィレンツェの危機におけるサヴォナローラの説教」『西洋史論叢』、23、2002、pp. 37-50。

(9) Landucci, Luca, *Diario fiorentino dal 1450 al 1516*, a cura di I. Del Badia, Firenze, 1985, p. 95.

(10) 初版と第2版は同じ出版元ボナッコルシ Bonaccorsi から出版され、同じ日付が付けられているが、両者間にはページの割付や挿絵などに相違点が見られるため、初版と第2版とされている。Ridolfi, *op. cit.*, p. 320.

(11) *Ibid.*, p. 111.

(12) *Compendio*, p. 3.

(13) *Compendio*, p. 3.

(14) *Compendio*, p. 4.

(15) *Compendio*の二番目の部分に書かれた「神のお告げの祝日から8日目に見た幻想」を指している。

(16) *Compendio*, p. 122.

(17) Ridolfi, *op. cit.*, pp. 55-63.

(18) *Ibid.*, pp. 108-110.

(19) *Compendio*, p. 383.

(20) *Compendio*, p. 4. また、サヴォナローラは、1492年に印刷された小冊子に、イタリア語俗語で書くことの必要性について、「無知な人々や才能に乏しい人々にも十分に理解させるために」と記している。Rusconi, Roberto, 'Le prediche di fra Girolamo da Ferrara: dai manoscritti al pulpito alle stampe', in *Una città e il suo profeta. Firenze di fronte al Savonarola*, a cura di G. C. Garfagnini, Firenze, 2001, p. 211.

(21) Savonarola, Girolamo, *Verità della profezia: De veritate prophetica dyalogus*, a cura di C. Leonardi, Firenze, 1997.

(22) *Compendio*の原稿や手書きによる写本は存在せず、現存するのは７種類の出版本だけである。編者クルチッティは、それらの中から1495年８月18日のBuonaccorsi版（初版）、同じく1495年８月18日のBuonaccorsi版（２版）、1495年９月１日のMorgiani e Magonza版（3版）、1495年９月５日のBartolomeo版（４版）を用い、辞句の相違部分を検証した上で、国民版を編集している。*Compendio*, pp. 397-425.

(23) *Compendio*, p. 5.

(24) 本稿では、「神のお告げの祝日から８日目に見た幻想」の内容には言及しなかった。なぜなら、この幻想の描写は、「人間性の誘惑者」とサヴォナローラとの対話、王冠についての説明、天使団の神学的説明など、本稿の論点とは異なる内容だからである。これらについては、今後の課題としたい。

(25) *Compendio*, p. 5.

(26) ヘブライ人への手紙、4-13。

(27) *Compendio*, pp. 6-8.

(28) *Compendio*, pp. 12-14.

(29) *Compendio*, pp. 22-23.

(30) 1490年のことである。Ridolfi, *op. cit.*, pp. 25-26, 283.

(31) *Compendio*, pp. 8-9.

(32) *Compendio*, pp. 9-10. 引用中には、「1490年の四旬節」と記されているが、実際にサヴォナローラが恐るべき説教を行ったのは、1491年２月27日である。Ridolfi, *op. cit.*, p. 32, 285, 405.

(33) *Compendio*, pp. 10-11.

(34) Parenti, Piero di Marco, *Storia fiorentina, I: 1476-1478, 1492-1496*, a cura di A. Matucci, Firenze, 1994, p. 144.

(35) *Compendio*, p. 21.

(36) *Compendio*, p. 19.

(37) *Compendio*, p. 14.

(38) *Compendio*, p. 15.

(39) *Compendio*, p. 20.

(40) *Compendio*, pp. 15-16.

(41) *Compendio*, p. 113.

(42) *Compendio*, pp. 119-120.

(43) *Compendio*, pp. 118-120.

(44) *Compendio*, pp. 121-122.

(45) *Compendio*, p.23.

(46) *Compendio*, p. 21.

(47) *Compendio*, p. 122.

(48) *Compendio*, p. 124.